

# 水牛通信

VOL.4 NO.1  
毎月1回・10日発行  
定価200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

自分の家は自分でつくる

石山修武 24

坑夫と魚 鎌田 慧 23

日本のマンガつまんない リウスさんの話 20

水牛楽団のページ 19

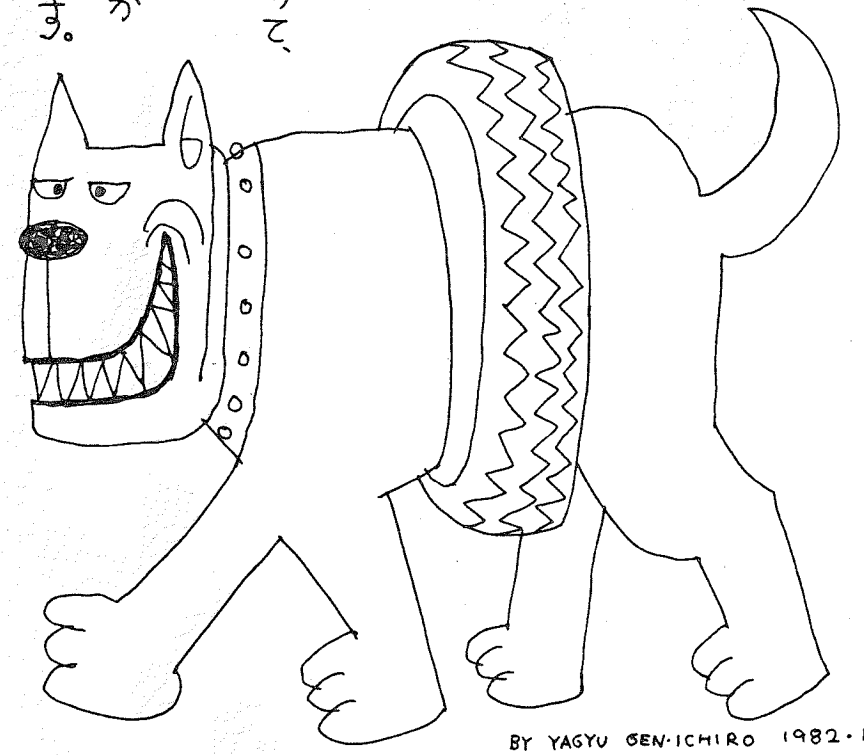
土地ころがし 黄哲暎 4

イロハ歌絵咄 柳生弦一郎 2

# イロハ歌絵出

いぬが歩いて棒があたり  
 いぬが歩かで骨あたる  
 いい棒もありやあ  
 いやな骨もあるわと  
 いぬがいった

と、長谷川四郎さんの「いぼはうた」にあつて、  
 それじゃあ、まあ歩いてみて  
 ボッ」とホネッ」にあたってみるか  
 と歩き出したのが、このたてであります。



BY YAGYU GEN-ICHIRO 1982.1

「じゃあ、こっちは何なの？」  
 こたえ —  
 歩かで火のないひばちに  
 あたっている男と猫  
 であります。へんへん。

「それがどうしたの？」  
 イヤ、アラ  
 そんなおれと  
 ぼくは、その  
 論より証拠で  
 花より団子なのであります。





ドントク な、なんだい、小銭か？ 俺のサ  
イフにはな、おもに紙幣、高額小切手、手形、  
クレジット・カード、土地権利書……（とい  
いかけて、口をふさぐ）

巫女（まるく踊りまわって、金を拾ってい  
るドントクのうしろ首をおさえる）シー、シ  
ー、シューッ。  
ドントク（手をすりあわせて祈るしぐさを  
しながら逃げる）

ドントク いや、いや。俺はマネーのドン（金）  
の字に劇薬の毒（トク）、金にも毒というん  
でドントクというしがない男。新しい金、古  
い金、紙幣、銅銭、なんでもかまいやしませ  
んよ。万年も生きるブルガサリ（熊・象・  
牛・虎が混淆したかたちをしていて、鉄を食  
い、悪夢や邪気を払うといわれる想像上の動  
物）のように、金物だつたらなんでも呑みこ  
みまさら。（一生懸命に小銭を拾う）犬だと  
いわれてもいい、金さえもうけりゃいいんだ。  
なんでもさせてください。金をもうけるため  
には人情も良心もありません。金だけ、金  
だけでもうけりゃいいんだ。

巫女 おほ、お願いいたします、お願いいた  
します。守り神さまにお願いいたします。姓  
は耽羅、名はコリヤンブ、守り神さまにお願  
いいたします。今日のお願いごとはなにかと  
申しますと、食べ物をごさいます。衣食は、  
人間が生きているあいだは稼いでも貰っても  
足りるものでありますが、このたびは、わた  
したちの島がよそ者に食われようとしている  
のです。なのにこのことをどこへ行つて訴え  
ればいいのでしょうか。ヨンジュ山もろと  
も出ていかねばならず、耽羅の百姓たち

拾っている最中に、観客席から邪魔した  
り、からかったりするが、すばやくかきあ  
つめる。このとき、チマにチヨゴリ、紙の  
冠に、腰に赤い紐、鈴と神刀を持った巫女  
が登場する。

巫女 おほ、お願いいたします、お願いいた  
します。守り神さまにお願いいたします。姓  
は耽羅、名はコリヤンブ、守り神さまにお願  
いいたします。今日のお願いごとはなにかと  
申しますと、食べ物をごさいます。衣食は、  
人間が生きているあいだは稼いでも貰っても  
足りるものでありますが、このたびは、わた  
したちの島がよそ者に食われようとしている  
のです。なのにこのことをどこへ行つて訴え  
ればいいのでしょうか。ヨンジュ山もろと  
も出ていかねばならず、耽羅の百姓たち

財閥（ペコペコするドントクに）はあ、ま  
ったく鼻くそみたいな島だな。（手で観客席

を指しながら）すると、あそこが魚が群れを  
なしている海で、（マダンの内側をひとまわ  
り指し）ここが陸地（本土）だということだ  
ね？ ここでゴルフをやつたら、ボールは海へ  
落っこちるだろうよ。（ゴルフの真似）おいド  
ントク、お前は俺がいかにかスケールの大  
きい人間であるか、よく知っているだろう。

## 第一場

ドントク、飛行機のように両手をひろげ、  
そのうしろに財閥と日本人、腰をつかまえ  
て、マダン（広場）に飛んで入ってくるし  
ぐさ。

財閥（ペコペコするドントクに）はあ、ま  
ったく鼻くそみたいな島だな。（手で観客席

## 解説

# スヌルムの文化宣言

韓半島の最南端に、ちようど捨て子のように  
ひとり横たわる耽羅という美しい土地で、  
わたしたちは生れた。ここは文化的辺境、行  
政的僻地であるが、それ以前に、民族の魂が  
脈打つ韓国の国土である。このことに、わた  
したちは誇りを感じている。今日のとてつも  
ない歳月の早さのなかにあつても、祖先たち  
の聖なる生のいとながみが、池の波紋のように  
生々しくわたしたちの周囲に残っている。し  
たがつて、ここは中央と比較すると、辺境で

はなく、消えゆくわたしたちの伝統文化に活  
力を供給する前衛の場である。いまこそわれ  
らはこの土地に波紋を生じさせ、それを外来  
文化が氾濫する中央にまで伝わせてゆかな  
くてはならない。

この土地で行なわれるすべての文化的行為  
に対して、わたしたちは熱烈に賛成し、するど  
く批判する権利と義務を持つようになるだろ  
う。わたしたちは頑固な権威主義に反対し、  
澁刺とした諷刺家であることを自認しなけれ  
ばならない。わたしたちはまた、わたしたち  
の民俗遺産が、一定の居住地域を与えられた  
アメリカ・インディア人たちの孤独で絶望的な  
戦争踊りのようになることを拒否し、わたした  
ちの祖先の汗と苦痛のしみ込んだ生活道具が  
豪華な応接間をかざるために陸地（本土）に  
運ばれていくような反文化的現象から守らな

ドントク そりやもう、よく存じております  
とも。財閥さまは（演説調で）すぎし日をか  
えりみれば、（少し間）そうかえりみるこ  
もないが、豚のように貪欲で、鉄面皮で、そ  
して無智な権力をふりまわし……。

財閥 こいつ、なんだつて？  
ドントク あ、いえ、いえ。なんでもありま

くてはならない。

効率性こそもつとも有益で正当な美字であ  
るといふ言葉のように、わたしたちはいま、  
試行錯誤のなかで出発しようとしているのか  
もしれないが、いつかは明日のための実践の  
なかで新しい価値をさぐりあてることができ  
るだろう。かしく執拗にためらうことなく、  
一歩ずつ進みでていくべきである。すべての  
歴史の瞬間、歴史のひとつコマひとつコマは、ど  
んなにとてつもなくみえても、じつはつまら  
ない愚者たちのいたずらの集積にすぎない。

伝統文化を死守すべきこの狭く小さい橋頭  
堡で、いまわたしたちの「スヌルム」の忘れ  
られた身体が動きはじめる。  
叩け、太鼓を打ち鳴らせ！

せん。どう聞いたんです？ 獅子のような勇気と、仏さまのような慈悲心、そして勤勉誠実をモットーとし、といました。

**財閥** そう、勤勉誠実そのものだよ。

**日本人** (降りてからずっと、あちこちカメラでうつしまわる)

**ドントク** 耽羅には、よそでは見られない千八百種類の生物があります。火山によつて生じた穴の多い玄武岩、その奇岩化石におりなす美しいものがいたるところにあり、海にはアワビ、ナマコ、ハマグリなどの海の幸、山にはキジ、鹿、猿などが自由に飛び、かけまわり……

**財閥** おいこら！ 猿がどこにいる？ アフリカや赤道直下の島じゃあるまいし？

**ドントク** 土人も猿もおりまして……これはちよつとおかしいな？

**財閥** この野郎、ここは済州島だよ、済州島ドントク すると、あそこでバカみたいになさつきからうるちよろしているのはなんですか？

**財閥** (いっしょに手びさしをしてみても) あ、なにをいうか、あれは私の兄貴分にあたる親友だよ。事業のためにいっしょに来たんだ。**日本人** (女性観光客を追いまわしながら懸命

にプロボトズする) ワタシネ、キーセン ヒジョーニヒジョーニ 好キネ。カヤグム(伽耶琴)トカソリ(唱)、ワタシタチ 日本人 スキデス。観光ホテル イツシヨニ行ケバ、キレイナ朝鮮人オンナニハ、オカネタクサン アゲマス。アパート買ッテアゲマス。日本ケンブツ サセテアゲマス。

**財閥** あの方がまさに、この財閥、私の兄貴分にあたるマラテスさんだ。

**ドントク** 親愛なる耽羅国土人のみなさん。マラテスさんを紹介いたします。(日本人、あつかましくもあいさつする)

**ゼビと観客** (ウーウー) 日本人、消え失せろ、出ていけ(うるさい)

**日本人** ヤメテ ヤメテ、ソナナコト ヤメテ(歌) マラテスニ、マラテスニ、ソウイワナイデ。事業ノタメ 観光ノタメ 朝鮮ノ国ニ 入ルトキ、ワタクシガ 手ブラデ クルモンデスカ。

「ドル、マルク、フラン、ルーブル、円貨手形」(ドントクと財閥)  
アラユル 使エルモノハ ミンナ モット入ツタトキ、アナタタチ 甘イ汁 アリツイテ、アリガタイ アリガタイデスネ。

「ありがとうございます」(ドントクと財

閥)

ト イツタノハ オマエタチデナクテタレデスカ。腹ハッテイル奴ニハ 食ベサセ、死ニカケタ奴ヲ 助ケタ 日本人ニ 感謝シロ。朝鮮人バカヤロ！ 天皇陛下パンザイ！ マルテス マルテスハ、コンナモンダヨ コンナモンダ！

**ゼビと観客** アンコール、アンコール。**日本人** イケマセン、イケマセン、アンコール イケマセン——アリガトウゴザイマシタデス。(終つてからふりむいて)ア、ヒジョーニ、イイ島デアリマスネ。近イデスネ、女モキレイデスネ。遊ビモ、ゴルフモ、釣りモ、ミンナイイデスネ。ワタシハ、アナタタチダケラ、信ジマス。(退場)

**ドントクと財閥** 犬のようだといわれてもいい、金さえもうけりゃいいんだ。新しい金、古い金、関係ない。なんでもさせてくれ。金だけもうけりゃいい。人情も良心もクソくらえだ。金、金、金さえもうけりゃいいんだ。(肩をくんで歌う)

**ドントク** ですが、あなた様は、どうしてここへきたんです？

**財閥** お前もよく知っているように、私は新しい金、古い金を問わず、誠実と勤勉をもつ

て山ほどの金を稼いだもんだ。借款、貿易、独占、脱税、買弁、なんでもかんでもやって儲けて、ソウルの漢陽に君臨していたが、三角山の山頂に登って南方を眺めてみると、その先端に笠のような島がチラチラ、飛行機に乗って手のひらのような小さい韓半島を飛び立ち、済州島のぐるりをひとまわりしながら、金になるところをみつげようと、ヨンジュ山のふもと、うつそうと繁った森林のなか、沼沢地をさがしまわつたが見つからず、あつちこつちさがしがぐねていたが、どこから金の匂いが漂ってきたので、ヨンジュ山の頂上に登って東西南北をひとわり見まわすと、お前がここで一生懸命に金を拾っているじゃないか。私はそれを見てここにきたのじゃ。ドントク そりやどうもご苦労さまでしたね。そうではなくても、あなたさまをお呼びしようかなあ、と思つてはいましたが、お望みどおり、よくお訪ねくださいました。それで、あなたさまはどういうところがいいでしょうか。

**財閥** 山もよく水もよいところを、このままほつておく手はないだろう。グイッとひと呑みにしたいところだが、口では開発だ、発展だ、島の人間のためだ、といわないとね。草

原はこれからの投機を考えると牧場にしておいて、平原の見晴らしのいいところは飲み屋、娯楽場、ゴルフ場を、あの広い海岸には海水浴場、ホテル、バンガローをたてる。すると、ほとついても金は滝の水のようにザーザー降りかかってくるもんだ。私がほしいのは、山中にあつては見わたすかぎりの山林、鉱石、天然物、果樹林、海にあつては数千の漁夫、数万の海女、港、埠頭、飛行場がほしいし、大草原、砂丘、住宅街がほしいし、蜜柑畑、休有地、防風林、みんなほしいよ。**ドントク** 心配ないですよ。あなたさまが、それをみんな持つようになつたら、私にはどうしてくれるんです？

**財閥** 百円もうけたら一円、百坪買つたら一坪あげるよ、同じ仲間じゃないか。**ドントク** そうですか。私はただあなたさまを信じます。**財閥** このてのびらのような小さい島の主は、いったい何人いるのかね？**ドントク** えいと、四十万人をすこし越えるぐらいです。**財閥** なあに、大したことないね。待てよ、ここからあそこまでほしいときは、だれを訪ねればいいんだね？

むごくに腹が出てくる)

ドントク 地方自治臨時措置法、無償使用は許可しない。賃貸を受けた者は手を上げない! (観光客から手があがる) 二億だ。五億だ。十億だ。賃貸を受けた島のやつはいないのか? どうぞ、賃貸。

財閥 三百万坪、ゴックン。(腹がまた出る) ドントク 二年たつと払い下げだ、どうぞ払い下げを。

財閥 漢峰山有林地七〇%ゴックン。(うしろにひっくり返りそうになり、よろめく) うしろからドントクがささえる)

ドントク そのままにしておいたのに、土地代が十倍もはねあがりました。無住宅者払い下げ用地です。

財閥 六分の一をゴックン。(もつとうしろに、ドントク息切れしそう)

ドントク さあ、農地です、畑です、田んぼです、農作物です。

財閥 観光開発区域だ、バンガローだ、別荘だ、ホテルだ、ゴックン。

ドントク さあ、麦、みかん、畑……  
財閥 清州市と麗水市を合わせたよりもっと大きい濟州島農場の六〇%、ゴックン。アイゴー。(うしろにひっくりかえり、ドントク下

に敷かれる) 食べすぎたかな?

ドントク (バタつかせながら) 助けてくれエノ 助けてくれエノ (苦しそうに起きあがり、坐つたあと、客席から立ち上つて報告書を読む)

報告書1 この国の財閥がみな、土地の投機に夢中になっているということは、だれでも知っている事実であります。彼らはこれからも、開発されそうなおところは、そこがどこだろうと手をつけるでしょう。そんな人たちが、美しく住みよい濟州島を、そのまま放置しておくわけがありません。だからいま、濟州島の主人は四十三万島民から、土地投機師に変わりました。

ぜひとも経済成長をやりとげなければならぬという精神面での価値観がまだしっかりつくりあげられていない状態のなかで、外来文化が氾濫し、それが古い価値観の変革をもたらす。いまこそ「わたしたちの濟州」をとりもどすときが来たといわねばなりません。濟州をとりもどす運動の背景にあるのは、どんな色あせていく伝統文化と精神的な価値観、破壊されつつある美風良俗や自然をもとへもどすことです。しかしなにもまして、わた

したちがかならず取りもどさなければならぬのは、わたしたちの濟州島の土地、土なのです。

報告書2 この間の関係機関が推進して来た有休地開発計画の実行課程において、資金のない原住民に、開発資金を援助してあげないような行政的支援を、全策計画に入れてない結果であります。行政的配慮というのは、大資本家の誘致を防ぎ、現地住民たちに対する開発資金の積極的な支援を意味するものでなければなりません。

報告書3 土地はみんな売られてしまい、観光開発措置も、この地域の人文的地域的与件と特性を無視したまま、娯楽中心の開発に大きな比重をおいています。実績を主にするあまり、行政主導型の開発がもたらす試行錯誤のとてもない弊害は、濟州島民に悲惨な結果をもたらすかも知れません。特殊地域の与件を無視した画一的な開発政策は、濟州島民みずから拒否しなければなりません。観光所得の地域分配にもっとも大きな関心をおくこと。そのためには、原住民も観光開発事業になんらかの形で参与できる道がひらかれるべきです。

報告書4 外部資本が入ってはじめて大小の

民たちの歌声がきこえるや、財閥とドントク、そつと退場)

## 第二場

マダン(広場)の外から船をこぐ仕草をしながら島民たちが入ってくる。

### 島民の歌声 (海女の歌)

干潮の東の海 満潮の西の海  
海にはなにがある 海にはなにがある  
帆立て槽をこぎ 波にゆれる船  
帆はよいよい 船はよいよい  
イヨサナ イヨサナ オ(イヨサナ)  
(イアト サナ)  
広い海原 ぐんぐん進み  
深い海底 もぐつていけば  
海の幸あまた イヨサナ イオトサナ

広場をひとまわりしてから、畑を耕す仕草にかわる。声を合わせて。

土地よ 土地よ 美しい土地よ

穀物稔る 美しい土地よ

二列に、または一列に、縦横に変わりがら広場をまわる。耕す歌。

ここはよいとこ 住みよいとこ  
草ぶき家建て 肥えた畑を  
耕し住めば 住みよいとこ  
こういう日は こういうことを  
汗を流して やつていけば  
みのある穀物 ひとりでも  
耕しすめば 住みよいとこ

土地を愛し、有難く思っている。たとえ労働はつらくとも、自由自在のやりがいある生活であることを表現する。

アボム おお、だいぶ働いた。すこし休んでからにしようか。

村の男B 酒でもいっばいやって。

村の男A どうせなら、ソリ(唄と踊り)でもやろうよ。

未亡人 ソリ……じゃ、わたしやってみようかしら?

村の男B オモムにしてもらおうよ。

工事がなされるようになって、濟州島の現実、農耕者だった原住民たちを、企業大工、農場の雇用人、小作人、そして日雇い人夫に落してしまうのです。あるいは、観光施設や娯楽施設の一時雇いに変えてしまうのです。おそまきながらも政府は土地投機抑制を経済安全施策のひとつとしました。財閥を中心とする分別のない土地投機が、この地の経済構造に深刻な被害を与えるばかりでなく、民心をよからぬ方向へみちびく心配があるためです。政府のこのような施策は、他の地方の住民たちとともに、濟州島住民にも大いに歓迎されましたが、このような施策がもつと早く実施されなかったのが残念でなりません。しかしここで共に考えるべきことは、濟州島に外部からの資本が入ってきたのは、かならずしも財閥たちの無分別な欲のためだけではないという事実です。実際に濟州島の官民たちは、濟州島自体の経済的限界のために、外部資本が入ってくることを望み、そこに大きな期待をかけてきたのです。だから、わたしたちが展開する「濟州島をとりもどす」運動も、濟州の人たちがみずから反省する運動によって裏うちされなくてはならない。このことをぜひ指摘せずにはいられません。(外で島

アボム この野郎、お前の女房にやらせないで、どうしてひとの女房にやらせようとするんだ。

村の男A いやならいいよ。もうすこしすると、うちのあの黄色い犬をつぶして、ドブロクといつしよに持つてくるはずだが、今日はそういわないでやつておくれよ。

オモム いいよ、いいよ。私がやるから。

村の男女 (声を合わせて)

土地よ 土地よ 美しの土地よ

穀物稔らす 美しの土地よ

ちぐはぐな調子とともに歓喜雀躍する農夫、さつきとは別の節であり踊りである。財閥、ドントクの案内で踊り場に入つてきて、ドントクにいわれたオモムを抱きかかえて踊りまわつて、でていく。これからは劇中劇の場面になる。村の男A、オモム、村の女たちが登場人物となり、ときによつては、あとの人びとは観客と入りまじる。

アボム おらあ、おらアらア……(馬を追い集めるときのかげ声の真似をしながら)東の方へ、西の方へ、牛百頭、馬百頭。ぐずぐずしないで、あの牛あの馬追い込め、おらら

ら、おらアらア……

オモム (大きいピンをひもでくくつてチマのなかにまきつけ、腹をふくらませてから)アイゴ一足が、アイゴ一肩が痛くてどうしよう。骨はいたみ、身体はだるい。こんなことつであるかしら。(アボム、舌うちしながら嫌な顔する。村の人たち、ケラケラ笑いながら野次る)

村の男B ガマ蛙みたいなお腹して、お前はもう子供を十二人も生んだじゃないか。そのくせして、毎日女房にひつついていながら……どうにもしようがないよ、まったく。

未亡人 (ニヤツと笑いながら)さつき、向うの畑で仕事していたら、ソウルから来たじいさん、そつと寄つてきて、まあ、失礼ながらありやしないよ。

アボム この野郎たち、ひとの女房になんという、この女、家へ帰つたらみてろよ。

村の男A あ、なまやさしいもんじゃないな。どうしても、なにかあるらしい。

オモム どんなこと? あててみて?

村の男B 待てよ、おうかがいでも、たててみようか。

オモム だれか知っている巫女でもいるかしら?

なにがなんだかわからないだろう。

オモム いますか?

未亡人 だれです?

オモム このごろ身体がおかしいので、みてもらおうと思つてやつてきました。一度みてください。

未亡人 甲子、己丑、申酉(指おりかぞえる)

あ、北の方からきた人だわね。

オモム そう、そうです。

未亡人 あ、そういえば、あの巫女も……。

村の男B あ、知つてる巫女だ!(膝を打つ)

未亡人 でも北から来たとしても、それはただごとじゃない。よく考えてみなさいよ。

オモム そんなんじやなく、北の方はうちの畑で、芋でも掘つて売ろうと、畑にいたとき、いきなりだれかがおそいかかつて、抱きつき、あとはなにがなんだか……ただ、それだけ、あ、大変、大変なことをしてしまつた、どうしよう。

未亡人 ね、すると麻の根でも煎じて飲めば墮りるというから、やつてみない。

オモム (足を踏みながら)それはできないうよ。

未亡人 何月何日と日を決めて、クツ(巫女の占い)をやりなさい。そのとき、よくお告

村の男A どこかにいるだろうよ。(観客を指しながら)だれか知っている人はいませんか。(村の男女、それぞれ野次るしぐさ)

オモム (広場をぐるぐるまわり、それらしい人の前のところへ行つて聞く)います? だれか。私はもう骨もズキズキ、ムカムカして、いまにも吐きそう。これもみんな、なにかのたたりじゃないかと思つて。(観客、黙っているか、適当なカケ声)ここには誰も知っている人はいらないわ、どこかほかにかしらは?

アボム お前、ほんとうに家に帰らないつもりか? 足をへし折つてしまふぞ(追いかけていつて、手首をつかまえて、引きもどそうとする。村の男女抗議、観客も抗議)

村の男B なんで、自分たちがやつたくせになにをしている。

未亡人 自分でやつたとしても、雷で豆を煎るように、アツという間の……できごと。罪はありませんよ。

アボム なにをいう、馬や牛は「君のもの・私のもの」でなくてもいいが、土地と女房は主人がいなくちゃ駄目だよ。

未亡人 どうしても駄目なら、私はまつとうな未亡人ではないのね。

げを聞いて、「アイゴ一、腰が」といつて坐り、ぐるぐるまわりなさい。なんといつてもいまはそれしかないよ。

オモム 行けというなら、行きますけど。

未亡人 (舌うち)そうだよ。そうするしかないじゃないの。村の者になにかいわれるだけだよ。

村の男A 早く、ひとりで行つてみな。(オモム、提灯を持って行くふりしながら、マダンをぐるぐるまわる。劇中劇の観客である村の人たちのカケ声につれて動作する)ひとが困つていても、だれも知つて知らぬふり、シユウトもシユウトも、知らぬふりばかり。

村の男B そうだ、そうだよ。コジユウトも見て見ぬふり、夫すら見て見ぬふり。

アボム 見て見ぬふりだと、私がいつ? このあま、早く入らないか?

未亡人 なにをいつてるんです、私がいるじゃない、私が。

アボム (怒つて立ちあがるうとしたが)

村の男A (酒を飲むしぐさ)

アボム (いつしよに手を持ちあげる)畜生め。

オモム (長鼓を持ってマダンをぐるぐるまわつて、水ガメに水を汲み入れるしぐさ)

ゼビ（長鼓でドンドン、水を汲む音をだす）  
オモム（足を踏みはずして倒れるしぐさ）  
アイゴー、腰が！ アイゴー、腰が！

村の男A あ、倒れちゃった。

村の男B なんてことを。

未亡人 アイゴー、月日がたつのは早いものだ。もう産み月なのね。もうひと息、あともうひと息、がんばって、頭がでてきた。（オモムの腰にまきつけてあるピンをほどいて出す）あ、生まれた、生まれた。（腕まくりして）これだ、これ。

村の男B それはなんだい、細長いじゃないか。  
アボム（顔をほころばせて）おほほ、男だつて、男。

オモム 目も鼻もない赤ちゃん。この赤ちゃんの名前、なんとつけよう？ アラララ、カクン？

村の男A ほ、そいつ、細長い、いい顔しているじゃないか。アラララ、カクン。

オモム なんといつても、この子の父親をさがさなくちゃ。

アボム（自分も知らず、そつと近づき）アララララー、コクン？  
未亡人（きつく）あんた、あっちへ行つて。

が鳴りだす。ドントク、両手で追い払いながら、財閥はこうまんに歩きながら、線の内側を往復する。村の男女、その動作を突っ立って首だけで追う。

財閥（内ポケットから金を出してドントクにやるしぐさ）  
ドントク（受ける）

財閥 ところで……お前は私がどういう人間か、よく知っているだろう？

ドントク 仏さまのような広い心と……

財閥（物足りないように、うなづく。間）  
広い心はあたっている。

ドントク あ、スケールの大きい人でした、ですよ。

財閥 まさにそう。私はスケールの大きい人よ。

ドントク よくわかりました。（線の内側をぐるっとまわってから）だから……ここはまだすこし……物足りない、というのですね？  
財閥 すこしどころじゃない。非常にだ、非常に。

ドントク は、そんなことぐらい、なんとかなりますよ。

父親をさがしにおいき、（ピンの首をとってひとまわし）お前の父ちゃんのところへ行つてみな。お前の父ちゃんさがしてこい。（ピンがころがっていき、財閥の前にとまる）フン、こいつが、わたしたちのオモムを苦しめた奴だな、それらしい顔をして、それこそ強盗よりひどい奴だ。ひどい目にあわせなくちゃ。（つかまえて、しきりにいつていたが、ドントクがとめ、やつとふりむく。そして観客のなかの適当な人を見はからつて、その前にいきわめきたてる）てめえの親に聞いてみる、てめえの親に聞いてみる。（そんなことあるかといつて、わめき散らす）えい、わたしたちで育ててやれ。

オモム どんなに勉強させたつて、書堂（塾）の先生が天地と千字文を教えても、それより飯がほしいというにきまつている。どうみても勉強のできる奴じゃない。百姓でもさせてみよう。

村の男女 土地よ、土地よ、美しの土地よ。穀物稔る、美しの土地よ。

古びた長鼓をたたく人、馬で耕す人、種まく人、耕す人、刈る人の動作が次々とおこなわれる。このときのマダンは、かれら

またもや紐をもって、別のところへかけつける。さつきと同じやり方で、村の人を外へ追いだす。二、三回くりかえすと、もう村の人たちの立つところさえなくなる。せまいところでもみあつている村の人。

ドントク どうです？

財閥 だいぶよくなったな。（ひたいに手のひさしをして、観客席をひとまわりみまわしてから、銃に弾をこめるしぐさ）  
ドントク こんどは弾ですか？

財閥 どこか、いい獲物はないか？  
ドントク（観客を指しながら）あそこの肥ったネズミどもはどうです？

財閥 あ、あそこのやつらだろう？（撃つ）  
パン、パン。

ドントク（背を低くして、匂いを嗅ぎながら歩くしぐさ）あそこの、あの肥えた雌鹿はどうです？  
財閥 あ、あの女のこと？ パン、パン。

村の男女、線の外に坐っている。村の男A、未亡人、そつと線の内側に入っていく。

村の男B どこへ行く？

の農耕の現場である。ドントクと財閥登場。  
ドントク（棒にゆわえた紐をもって、かれらのなかに入っていく）いいですか？

財閥（大きくうなづく）

ドントク（勝手に紐でひいた線のなかに、人が入ると追い払う）おい、でていけ、でていけ。

村の男女、ポカンとする。線の内側に入っていた村の男A、B、たがいに顔を見あわせる。

村の男A B わたしたちのこと？

ドントク（いちど財閥をみる）

財閥（大きくうなづく）

ドントク（自信満々と、虫ケラをつまみだすしぐさ）

村の男A B どこへ？

ドントク（また財閥を見る。同じ動作をくりかえして）線の外にだ！

村の男A、B、まだなんだかわからず、首をかきげながら線の外にでる。財閥、腹を突きだし、こうまんに歩いていく。太鼓

村の男A ご飯、食べにいく。

未亡人 働かないと食べられないからな。

ドントク（待ってたとばかり、財閥をふりむく）

財閥（うなづく）

ドントク いらつしやい。よく来たね。早くいらつしやい。（かれらの肩をたたき、未亡人をくすぐりながら）よく来たな。あんたは山を受け持つ……それとも農場？ うん？ わかった。

村の男A、スコップで掘るしぐさ、未亡人、ミカン採るしぐさ。ドントクがかがむと、財閥はそれを飛びこえる。それをくりかえしながら退場すると、村の男A、未亡人もついで退場。

### 第三場

村の男女、ドルハルバン（済州島の守り神）の仮面をかぶつて、一歩ずつ踏み込む格好でマダンに入りながら、順番に飛び上つては一列に並ぶ。それから、ひとり中央に



立ち、四人はそれぞれ東西南北に立つ。財閥、鬼の仮面をかぶって、周囲をジロジロ見まわしながら入ってくる。その方向にドルバルバン。鬼を発見して、それを止めるしぐさをする。かかつていつては、鬼に打たれ倒れる。まんなかのハルバンを中心に、たがいの腰につかまって並んで向っていく。鬼は一番うしろのハルバンをつかまえようとする身振り、戦闘的な楽器の音。一番うしろのハルバンをつかまえる。つかまえられたハルバンはそこに崩れ坐る。順番につかまえられるハルバン、次々に坐つたあと、鬼、かれらを飛び越え、場内をまわりながら退場。

#### 第四場

オモム なんといつても、土地を売らなくてよかった。あのいも畑、野菜畑、麦畑、なんどありがたいことか。  
アボム これ私たちも金持ちになれるよ。あのソウル財閥の土地が、もう二十倍も上つたというじゃないか。もう黙っていても、金

な真似をしないように、鶏の首をひねるようにひねってしまいなさい、ひと思いに……(夫の手をひねる)  
アボム この野郎(手をふり払って、村の男Aのところを駆けていく)お前はちど、ひどい目に合わないよ。

かれが広場を渡ろうとするとき、ドントクがうしろに手を組んで中央にそろそろ出てくる。

ドントク お、ちよつと、ちよつと、どこへ行く？  
アボム どこへ行く？ みればわかるだろう！ あそこへ行くんだ。

ドントク あそこって、どこだ？  
アボム 西の方だ。  
ドントク たしかに西の方は西の方だが(唄で)私が鳥ならば、私が鳥ならば、飛んできくものを。あそこに見える、あそこに見える……

アボム よけいなことを。(そのまま行こうとする)  
ドントク ちよつと、そつちへ行くと、ひつかかるよ。

持になれる。畑仕事してなんになる。適当なときを見はからって、ぜんぶ整理して、私たちも海水浴場について商売でもしようや。

オモム なにをそんな、心にもないことを、あの財閥はなまやさしい人間じゃないよ。地に粟つぶが落ちても、金が落ちたほかに思う人だもの、私たちの土地が二十倍も上るのを黙って見ているわけがないよ。

アボム 心配するな。私も骨のある人間だ。チェ……誰が勝つか、みればわかる。まさか、この俺に勝てるとは思わないだろうよ。

村の男A (口に手を合わせ叫ぶ)おーい、芋掘って、豆を刈りたらなくちゃ！ 俺の声きこえるか？

アボム (わけがわからず)あ、あいつめ、なんであんなところでわめいているんだ？ 足が悪いんじゃないし。

オモム そうですね。芋でも食べに(こいといつてるんじゃないかな？)  
アボム それとも豆について、餅でもつくつたかな？

村の男A (手ぶり身ぶり)あんたの畑の近くにある、私の、芋畑から、芋を掘ってきてくれないか？  
アボム (手ぶり身ぶり)うちの庭になにか

アボム ひつかかるって、なにをいう、草原なのに、なににひつかかるっていうんだ。  
ドントク 草にはひつかからないが……法律にひつかかるんだ。

アボム 法律？  
ドントク そこは私有地だよ。人の土地に無断で入っちゃいけないよ。

アボム アイゴ、それであいつが、あそこであんなふうには踊っていたんだな。  
ドントク (埃でも払うように)もどれ、もどれ。

アボム なにをいう、向う側の私の畑にどうやって行けというんだ。  
ドントク 行こうとすればがタタタタ、タタ……これがないよ。

オモム タタタ、なんだいそれは？  
アボム タタタタ？  
ドントク まったくもう、わからないんだな。

ヘリコプター、トンボ飛行機のことだよ。ヘリコプターを買って、自分の土地までビューンと飛んでいって耕し、それから飛んで帰ればいい。それがいやなら、道路の通行費を出すよりほかあるまい。

アボム お前こそ飛んでけ。  
ドントク (埃でも払うように)もどれ、も

食べ物があつこちている……？

オモム いやいや、自分の家に掘っておいいた芋があるから、食べにおいで……？

アボム あ、やつとわかった。うちの畑の近くにある自分の畑から芋を掘ってきてくれというんだよ。(動作をくりかえすと、村の男Aうなずく)

オモム なんというやつだ、あいつは。私たちがだつて猫の手を借りたいほどいそがしいのに……自分はずつとして、人をアゴで使うつもりか？

アボム (手ぶり身ぶり)この野郎、お前が勝手に掘ろうが掘るまいが、かまひやしないが、こつちはいそがしいんだ。

村の男A (手ぶり身ぶり)なんだと、あの馬鹿が、ひとの芋を勝手に掘って、みんな捨ててしまう？ この阿呆の大馬鹿もの、お前みたいなやつは、ひつかまえて、ポキポキ骨をへし折って、たきつけにしてしまおうから、そう思え。

アボム (腕をまくりながら)よし、あいつ、ほんとうに、もうがまんならん。すぐ行ってあいつを木に吊してやる。

オモム あんな凶々しいやつはほつとくわけにはいきませんよ。早くいって、二度とあん

どれ。

夫と妻、境界線から出て帰っていく。

オモム どうすればいいんだ。とてつもない道路代をふっかけられたら、畑を耕すことができなくなるじゃないか。それに土地も、まともな土地代では売れないし。

アボム いいよ、もぐらのように地面の下に道を掘っても、私はやるからな。

未亡人、村の男B、荷物を持って村の男Aと広場をわたって、かれらの前に来る。

未亡人 私たちはここを出ていくことにしたの。

村の男B 村もなくなつたし、ひとの土地を耕したところでなんになる？

村の男A 俺たちは、最後まで売らないで頑張るつもりだ。

アボム 私も、私の畑に農作物ができるかぎり、どこへも行かない。

ドントク (ゆつくり出てきながら)お、この地方の発展のためには、みなさんの土地は売らねばなりません。

村の男A 土地を売ろうが売るまいが、こっちの勝手だ。

ドントク いくら自分の土地だからといって、この開発の支障になれば、土地収容令を発動させることができるということだ。(広場のはずれにいて、ドントクと財閥、ブルドーザーをくりだす。人びとは左右に散りながら倒れる。情容赦なく進むブルドーザー) 未亡人 アイグ、どうしよう。  
オモム アイゴ、私の芋、私の豆、粟、みんな駄目になってしまった。(泣く)  
アボム おお、私の土地、私の土地！(手でまさぐる)

村の男A (ベタツと坐る) もう、おしまいだ。

村の男B (未亡人に) もうおしまいだ、どうしようもない。行こう。

未亡人 自分の村を置いて、どこへ行く？

私はもう行かない。(泣いているオモムに手を差しのべる)

村の男A だいたい、こんなことってどこにある。国でもこんなことは知らないだろう。私たちの村で土地売買をするやつらは、みんな追いださなくちゃ。

アボム そうだ、そうだ、追いださなくちゃ。

かれら、立ち上がろうとするが、身体がいうことをきかない。太鼓の音がかすかに聞こえ、巫女登場。

巫女 さあ、村じゅうの不浄の物は、みんな掃きだしてしまえ。

巫女の神のお告げを受ける動作、群舞によってブルドーザーが壊される。財閥が逃げだし、人びとは倒れたドントクをかついで追放する動作、そして済州島の代表的な民謡を歌いながら乱舞、観客も参加する。

# 緊急支援コンサート ポーランドの「禁じられた歌」

出演 水牛楽団  
高橋アキ  
竹田恵子  
志村泉  
筑紫哲也

水木陽子  
林光  
松下武史  
工藤幸雄

1月27日(水) 6時30分開場  
中野文化センター(中野駅南口)  
前売一五〇〇円 当日一八〇〇円

問い合わせ 水牛楽団三九八一・一五七二四・一五九六五八  
全国一般労組南部支部 四三四一〇六六九  
アート・フロント 四七六一四八六八



水牛楽団のページ

タイ旅行以後の活動と今後の予定。

10月から11月にかけて予定されていた学園祭への出演は、一つをのぞいて全部中止になった。事情はさまざまだが、全体としては、いいかげんな企画で、ハデにやろうとたくさんバンドをよび、直前になって、できないことがわかって連絡してこない、という印象。

例外となった国立音楽大学学園祭は、「印象派以後」という現代音楽研究会の主催で11月2日(日)午後。音楽大学に現代音楽と、およそおかどちがいのところで、全員緊張した。いつかプレヒト・アイスラーの「おふくろ」をやったとき、ドイツ語でなくて日本語でうたったからわからなかったと抗議した芸

大生がいて以来、音楽学生を信用できない。だが、意外にも二百人位が最後まできてくれた。プログラムは中間に高橋悠治のピアノ演奏をほさんで、いつものレパートリーと戸島美喜夫の「バナナ食民地」。

11月4日(火)。水牛ミュージック・コンサート第4回「コザの向うにミクロネシアが見える。ゲストは林光、加藤登紀子。特別出演の川崎沖繩芸能研究会。曲目は「水牛通信」10月号の通り。二千人の会場に七百人近く。いつもの中野と違ってがちがいが、AAL A文化会議フェスティバルの一部でもあったことから、水牛楽団としても独走できなかった。だが、「うなぎ踊り」では、子どもたちをふくめたかなりの人数が舞台にのぼって、出演者全員とともに踊り、そのほかパンパイブ合奏やカラバウ・シスターズのうたう「トライデン・サブマリン」など多形であった。

11月28日(金)。国連パレスチナ・デー記念コンサート「パレスチナに愛をこめて」、日比谷公会堂。水牛楽団は、加藤登紀子と共に演じ、パレスチナの歌のほか、新作「パレスチナ組曲」、「日本の人びとへ」(詩・マイン・ベシノー、作曲・高橋悠治)などを発表する。音楽評論家中村とうように「へたくそ、

ひつこめ」などと、大声でやじられる。この種の職業人の日頃のながにがしい思いを代弁していたにちがいない。このコンサートには、ほかにヒカシュー、石黒ケイ、スーダンのウードの名手ハムザ・エルディンが出演した。

12月22日(火)、23日(水)、一柳慧の企画するコンサート「夜の来る前に」、西部美術館。こんな場所にできるのも最初で最後のことか。水牛楽団は、「林光ソングブック」と高橋悠治「名前よ立って歩け」(一九六六年に自殺した沖繩の青年中尾幸吉の詩による)を竹田恵子と共演する。福山敦夫はそのほかに、プレヒト・アイスラーの「おふくろ」と、プレヒト・デッサウの「時代錯誤の行列」をうたい(芸大生にはわからない日本語で)、一柳慧とアンジェイ・クシヤノフスキの作品の朗読者、プレヒト・ブレウカー「夜打つ太鼓」の解説者をつとめる。

一九八二年一月二日(土)。山谷越冬闘争支援 玉姫公園。

二月二十六日(木)、水牛ミュージック・コンサート都市シリーズ最終回「パンコクの大正琴」。タイから「生きるための歌」の創始者カラワンのメンバーのひとり中川五郎をゲストに。中野文化センター、七時。

# 日本のマンガがつまんない

## リウスさんの話



メキシコには民衆マンガのながい伝統があります——と、リウスは語りはじめた。しかし二〇世紀にはいって、アメリカ合州国の商業マンガがながれこみ、その圧倒的な力によって押しつぶされてしまった。

だが一九六〇年代の変わりごろから、さまざまな人民の運動——革命運動や労働運動、女性解放や教育や医療、一方的な開発に抵抗する運動などとむすびついて、あたらしい民衆マンガのうごきがはじまった。それはまた、おなじ時期のアメリカ合州国内部でのアングラ・マンガのうごきとも関係がある。ただし合州国のばあいは、商業マンガの制約をセックスと暴力によってのみ突破しようとする傾向がよかったが。

があるにはあるが、どちらかマンガによる伝記というだけでし。帝国主義論なんてない、ただのロマンチックな物語です。

見ました。私は好きじゃない。  
——ターザン・マンガをさかんに批判していましたね。

——絵そのものじゃないですよ。黒人たちの王というターザン・マンガのイデオロギーを批判したんです。貴族的だし、民衆を支配する白人神という考えがいやですね。

いま「トロツキー入門」と「メキシコ・マンガ史」を準備中とか。  
——ええ。でもメキシコではなく、世界のマンガ史ですけどね。来年にはだしたい。わたしの視点から見た世界のマンガ史ですね。日本のマンガもぜひ入れたい。おしえてくれませんか。

——ターザンに匹敵するものとしては「冒険ダン吉」というのがあるな。南の島に日本の神社をたてて、白い神じゃないけど、土地の人びとに日本の神さまをおがませるような場面もあります。で、さっきの英語版や日本語版の話ですけど、リウスさんの言葉は翻訳がむずかしいんじゃないですか。

——そのとおりです。私はメキシコでわる

リウスはおおよそそんな話をしたあと、メキシコのみならず、ラテン・アメリカの各地でくりひろげられつつあるマンガ運動の実際を、たくさんのスライドで見せてくれた。かれがはじめた絵ときマンガの方法も、さまざまなかたちで各地にひろがっている。教科書ふうのものもあればアメリカ劇画ふうのものもある。型にはまっていないところがいい。かれは日本にきて、日本のマンガもいろいろ見たらしい。「ドラエモン」「ドクター・スランプ」「花とゆめ」「少年チャンピオン」「ガロ」など……。どれもあまりおもしろくなかった。だいたい日本、というよりも、東京という都市がどうしても好きになれなかったようだ。こんなところにほんとうに未来がある

いとされている言葉、性的な表現などを意識的につかっています。それはもともとふつうの民衆がつかっている言葉なんです。自分のしごとをつうじて、そうした民衆の言葉に正当な権利をあたえたいんです。(ここにちのメキシコには、知識人たちがわざと「下品な言葉」をつかうという運動があるらしい。なにしろ上層の知識人がフランス語で話しあうというお国柄なのだ)

——リウスさんは絵ときマンガを描こうとして、どういうふうに仕事を始めるんですか。まず主題について勉強する……。

——ええ。ある本をつくらうと思ったら、その時代にだされたもの、その時代についてかかれたありとあらゆるもの——たとえば絵とか写真、雑誌のコピーとかをすべてあつめてしまふんです。たとえば「マルクス」の場合だと、まずそういう材料をあつめたうえで、つぎにマルクス自身が書いたものを読み、またマルクスの生涯や思想についての見解の相違があるとすれば、きちんと知るようにつとめます。一方の見方だけ——たとえばソ連の見方だけをとるということはしない。そこまで準備したところで、自分自身のレジュメをつくり、それを民衆の言葉にホンヤクするわ

——と、みんなにきいてみたい。マンガも同様というのだろう。

——あなたの「毛沢東入門」の日本語版ができましたけれども、もとのメキシコ版とはだいぶちがっているみたいですね。

——日本語版は英語版からの翻訳ですが、メキシコ版と英語版とは、ぜんぜん別の本です。かつてに変えてしまった。英語版の著者は「リウスとその友人たち」となっています。しかし、実際には「リウスとその敵たち」といったほうが正しい。日本には政治的なマンガはないのですか。

——ないというたほうが正確です。「マルクス」というマンガも「毛沢東」というマンガです。なかなか大変ですよ。本をつくる作業自体も大変だけど、いっぽうで週刊誌や日刊誌にヒトコマ・マンガをかいたり、油絵や版画のしごともあるので、時間のやりくりが大変なんです。

——助手はいないんですか。

——いません。メキシコでも日本とおなじで、マスプロ・システムが確立しているのですが、私はひとりです。だから、私は小学校しかでていないでしょう。だから、そうやって一冊の本をつくるプロセスで私が勉強しているんです。マルクスならマルクスについてかとき、それを自分自身で理解できるかどうか、それが重要です。私はごくあたりまえの民衆のひとりですから、私が理解できれば、読者もみんな理解できるはずだ。そう思っています。大学を卒業した人間が民衆に語りかければ、どうしても上から語りかけるかたちになってしまふ。そうなるようになってしまふ。だから大学でならうような言語をとさないで、じかに語りかけることが大切になるんですね。

——それから、いま私は仲間たちとクエルナバ

女中さんですね——いなかからでてきた農民の娘や、亭主に逃げられた女性たちが語る言葉を記録して、それをわれわれではなく、シロウトの農民たちがマンガにしていくな運動もやっています。彼女たちの半生とか、彼女たちが現在ぶつかっている問題を絵にして、それを出版していくんです。

——リウスさんの本のつくり方について、もうすこし具体的にきかせてください。

——さつきいったようなやり方で、ともかく最後までちゃんと構成をつくってしまおうわけですね。ただ「資本主義の歴史」という本の場合だけはちょっとちがっていて、以前、スエーデンのデモスという出版社がある私の本を、私になんのこともわりもなく出版したんです。もちろん一銭も金を払わずに——それで抗議したら、「イストリア・ボーゲン」というマンガ本を送ってきて、この本をどんなふうにつかってもいい、それで勸告してくれというんです。じつは私の「資本主義の歴史」は、かなりの部分がその本からとったものなんです。七〇パーセントぐらいかな。しかも、それがメキシコでは高校のテキストになっている。もう十二版目がでますよ。もう一冊、「メキシコのちっちゃな革命」という本が高

校のテキストになっている。

——いままでにこういう絵ときマンガを何冊ぐらいつくったんですか。

——二十五冊かな。そのまえに「アガチャードス」という雑誌、そのまえが「スベルマツチヨ」というのはスーパーマンという意味ですが、これを週刊で四百冊。それが禁止されたので、こんどは「アガチャードス」を百冊ぐらいだしました。寝とられ男という意味なんです。どちらも三十二ページの小さな雑誌で色刷り——毎号、ひとつのテーマで特集をつくっていました。

——メキシコの古いマンガ——たとえばかつてボサダなんかをやった仕事なんかも意識されてるんでしょうね。

——そのとおりです。こんどの報告では民衆に敵対するマンガの流れに焦点をおいたので、とくにふれることはしませんでした。ボサダというのは美術館におさまった伝統的なではなく、いまも生きています。歴史的存在ではなく、民衆が自分の必要に応じてつかうことのできる、その意味で現在の問題とピッタリかさなる存在なんです。

——シケイロスやオロスコヤリペロやタマ

## 坑夫と魚

鎌田 慧

そこは、「北海道炭鉱汽船爆発会社」とよばれてきた。十人、二十人の死亡事故などもの数ではなかった。二百人、三百人とケタ外れの事故が続出してきたのである。

「石炭の鬼」と俗称されている萩原吉太郎前会長は、その著『一財界人、書き留め置き候』のなかで、「災害は七年に一回の割合で発生した」と他人事のように書いている。彼だけがのうと生きながらえてきたのが、不思議であるが、それでもやはり寝覚めはけつて快いものではなかったようだ。というのも、ベルが鳴るとまた災害ではないかと飛びおきた、とも書いているからである。八一年十一月十六日の爆発事故のベルを、この三井資本の大番頭は、どんな想いで書いたことだろうか。

自殺未遂によって、わずか半年にして社長座からころげ落ちた林社長は、萩原の愛弟子だった。事故発生後、十数時間にして、坑

ヨとか……。

——タマヨは西欧派で白人の絵、欧米に自分の絵を売っては生活してきた人間ですから、ふつうの民衆は好きじゃない。つい最近、メキシコ・シテイにタマヨ美術館というのができたんですが、そこにはいろいろな人がタマヨにおくった作品が展示されているんです。ほとんどが外国人画家の抽象画。そしてメキシコのいくつかの銀行グループがスポンサーになっているということで、みんな批判しています。あとの三人にかんしては、われわれの偉大な伝統に属していると思います。一九三〇年代に革命芸術家同盟という組織ができて、メキシコの大部分の画家たちがくわわった。そこには日本人もいればアメリカ人もいました。この組織はすぐにつぶれてしまっただんですが、ただそれと関係して、民衆文化ワークショップという運動がはじまって、反ファシズムのボスターやマンガなんかをつくっていた。その影響はいまにもおよんでいると思います。このワークショップはまだ現在もあるんです。しかし最良の芸術家たちはいなくなりました。

暴力団幹部が立派に更生して、下請業者になつたものもめずらしいことではない。おそらく、大企業で、胸のイレズミを誇示しながら入坑できるのは、この夕張の炭鉱ぐらいのものであろう。

鼻の下にチヨビヒゲを蓄えたある元幹部は、八人の部下のうち、半分の四人をこんどの事故で殺してしまったのだった。それでも、彼は、いささかも感傷的になることはなく、死んだものよりも、生き残ったものの方が大変だ、といったのだった。経営者のリアリズムである。

十二月末現在、まだ四九の遺体が地底に横たわって救出を待っている。引き揚げられるにしても、春になってからである。さいきん揚げられた遺体でさえ、すでに身許の確認はできないほどである。坑内に注がれた夕張川の水は、ポンプで、また夕張川に返されている。

「肉はと、チヨビセゲはいったのだった。」もう夕張川に流れて、魚を肥やしているよ」

辛うじて残った骨が、そのまま打ち捨てられ、石炭に還らないことを、わたしは祈っている。労組は、すでに、燃えつきたボタである。

# 自分の家は自分でつくる

石山修武

ひろい世界のみなさんは建築のことを、本当をいえばなにも知らないと思うんです。建築というビルを想像したり、切妻の屋根を

思い浮かべたりするでしょう。でも建築ということがなにをさしめしているかという点になると、ひじょうにあいまいです。家とかなんとかという名前じゃなく、自分のすみたいものにすむんだということにすれば、ふしぎなものができるんじゃないかと思うんですが……。

洋服とか本だと、みんな自分のすきなものをえらんで着たり読んだりしているのに、建築だちがつてしまう。これがどうしてもオレのすみたい家だとか、オレじゃないとこの

家はつかいこなせないとか——好みの問題ぐらいいは、もつと徹底的にみんながわめきだしたらいい。

いま家を手に入れるには、どこかにすでにあるものを買うか、工務店がたてたものを買うか、プレハブ・メーカーの商品としての住宅を買うかですよね。住宅にプライスがついていて、それを買う——そのこと自体がおかしいんじゃないか。自分でつくれないものじゃないんだから、自分でつくる、つくったほうがいいというほうがあたりまえなんです。そこをどうやっていくと、家じゃないものか、というか、約束事からはずれたものがでてる。土管のなかにすんでもいいし、井戸の

なかにすんでもいい。木の下にすんでもいいわけだね。

専門職を否定するというと、なんだかしゃべったことばになっちゃうけど、実際に専門職がいなくていいところでは、みんなそうやっている。住むことと生きることがパラレルな感じで、うまくいつてる。たとえばマニラのトンドというスラムなんか、その人間にとっては地獄みたいなとこだということになってますけど、内部の人間による犯罪発生率はひじょうにすくないし、いい世界——きたないけれども、結局はいい世界なんです。あそこには、住居とか町を自分で、しかも協力しあつてつくるという単純なしかけがある。だからこそ

ああいうとほうもないものができてきたんでしようね。

スラムの建築というのは、あらゆる材料がつかわれてますけど、ぜんぶ都市のゴミですよ。マニラのスラムだったら、マニラのゴミが主要な材料になる。

そのそばにコンクリートの集合住宅をつくる、スラムの住人たちを収容しようとして、かならず失敗する。ニューマイヤーがつくったブラジリアだって、コンクリートでつくったピカピカの集合住宅はぜんぜん人気がなく、みんな、ちよつどはなれたバラックのスラムのほうにいつちやう。そんなことぐらいいはだれでも本当はわかっているんですよ。わかっているも専門家はそうはいわない。いったら自分のしごとがあぶない。

都市のゴミをつかうということでは、例の『地球カタログ』の編集者たちもかなり意識的だったと思います。それからドロップ・アウトをやった連中。かれらのしごととは、建築の世界のなかではほとんどかえりみられないけど、たいへんな運動だった。ただ持続しなかつたのが欠点だけど、アジアだったらもつとできるんじゃないかな。かれらはプロト・タイプをつくって終ったけど、もつと現

実の町に滲透していきけるんじゃないか。トンドなんか、すでに現実の町がそういうふうにつくられているという面があるわけですから。それはもちろん貧しいからだけど、なんというか、きれいな貧しさとか、貧しさがかかやるときだつてあるんだといえるのが、トンドみたいな町の特権だと思ふ。ただアジアの場合は、それと、ピカピカの近代建築にすむ連中との落差が大きすぎる。

日本の場合にはアメリカ型もトンド型もだめで、日本がいちばんむずかしいかもしれない。都市のゴミというわけにもなかなかないから、やすくてかんたんなものに眼をつけていく。そしてそれを自分なりにどう組みあせていくかということに工夫がある。ところがそのためのいいマニユアル（手びき）が、日本にはないんですね。ぼくも建築家です。日本がのまれて家をつくりませんが、いまみたいな時期には、それさえあればだれにでも家がつくれる手びきでもつくっているほうが、ほんとうだと思ひます。

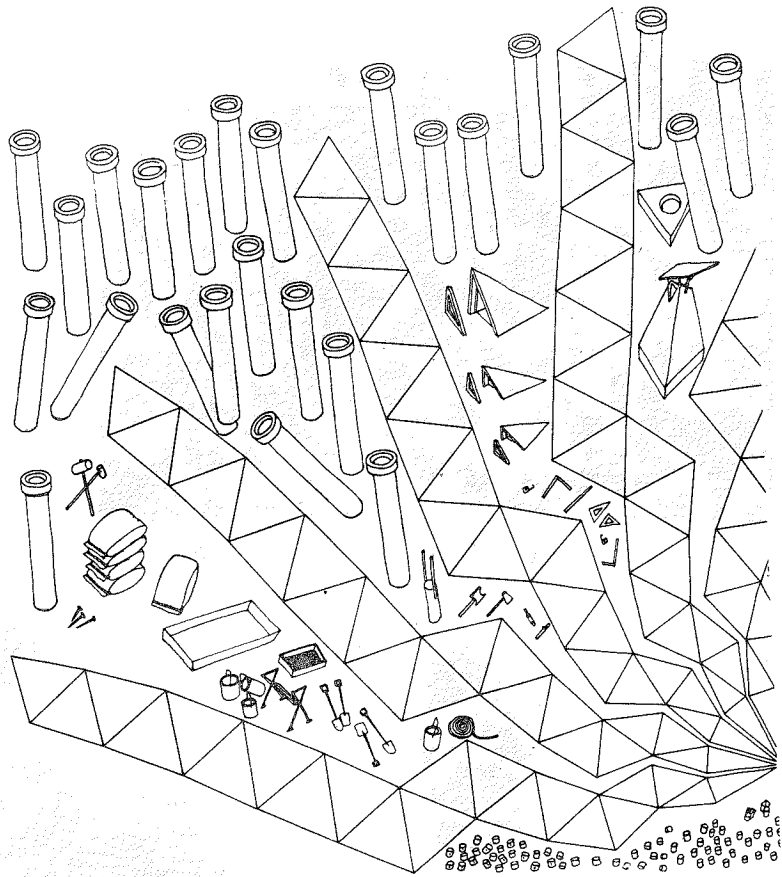
マニラなんかでも、日本からみれば東南アジアは後進国ということにされてるが、あそここのほうが日本よりも確実に先進国なのは、書店にいくと、かんたんな家のつくりかたの

本がドットとならんことですよ。ニューハウスとか『モダン・リビング』とかの、ほんとの情報をつたえていない日本の雑誌とは、ぜんぜんちがう。どこにいけばやすいブロックをいくらで買えるとか、それで何日ぐらいで家ができるとか、みんな書いてあるんです。コナッツ・ハウスといって、ラワン材とかのやすい材料をつかえば、何万円かの家ができる。そのなかでつかっている工業製品といたら、便器ぐらいのもです。その便器にしても、本をよめばちゃんとつくりにかたがでてるんですから……。

建築なんて、じつはかんたんなものなんです。それほど高度な技術も、高価な工業製品も必要ない。あとは自分の好みでこたわるといふか、なんでこんなツルツルの四角いところに住んでいるのかという疑問をみんながもつことの方が、大切だと思ふ。建築なんてもうムチャクチャにかんたんなものなんだというところから、そこからやりなおさなくてはいけないと思うんです。

## ベニヤ・ドームの家

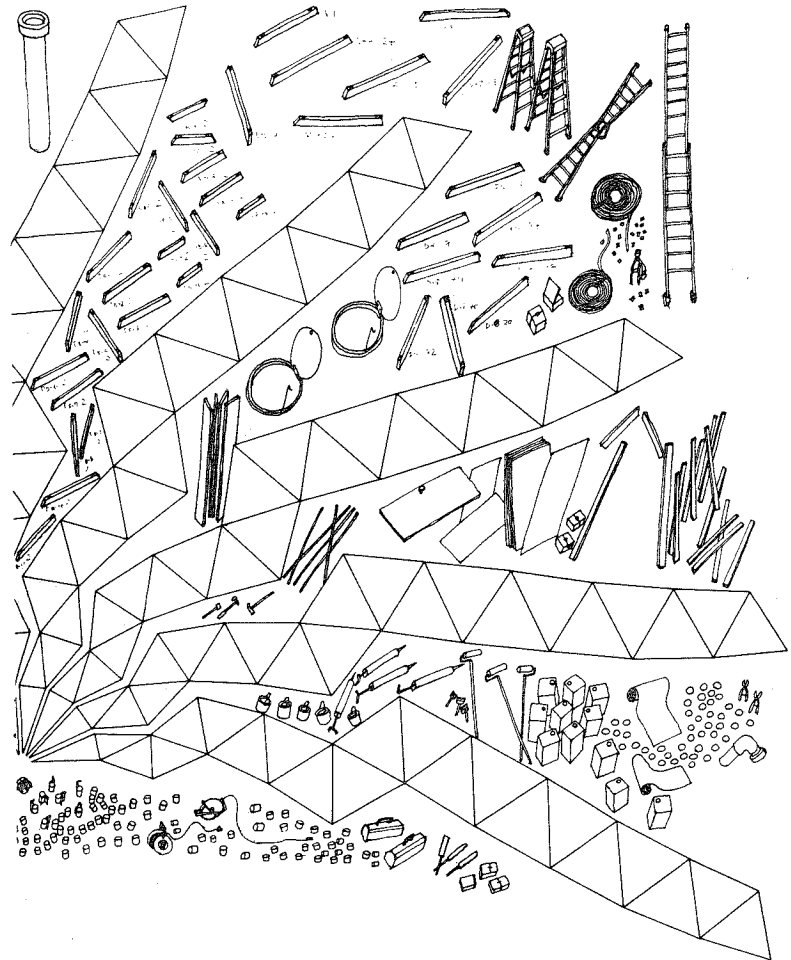
これはですね、この図にしたがつてつくる



それと、つかう人がそれをどう評価するかを  
つきあわせていく——それくらいのダイレク  
トなやり方でいけるんじゃないかな。ハダカ  
の、根つきりコッキリのプライスですわね。  
こういうふうな絵にしてみると、ちよつと  
フクザツなかたちをしているんですけど、よ  
く見てもらえば、住宅っていうのは意外にか  
んたんな材料でできているということがよく  
わかると思うんです。

この三角がたくさんあるのが一本一本の部  
材ですわね。それを、いちばん下にゴチャゴチ  
ヤとかいてある——これは水道管をちいさく  
切ったものなんですけど、こいつでジョイン  
トして、あと、この右上のところにあるステ  
ンレス・テープでまいておくわけです。一個所  
に六本の材木があつまる。そこをテープでと  
める。そうやってつくった骨組みに、厚さ10  
ミリのベニヤ板をクギで打ちつけていく。

左上の土管は地中に埋めて基礎にするん  
です。コンクリート・ヒューム管で、一本二五  
〇〇円ぐらいかな。この絵にかいてあるもの  
ぜんぶで一二五万円。それに、この家は三十  
八人の人たちが共同の山荘としてつくったん  
ですが、五年半、週末ごとにかよってんだら  
んつくっていった、その費用が四五〇万ぐら



とタマゴ型の家ができるという、その全部品  
です。これは、ぼくも施主たちといっしょに、  
五年ぐらいかかってつくった。部分部分の設  
計と、数式を考案したのがぼくで、あとは施  
主というか、この家にすむ人たちが自分で組  
みあげたんです。

それと材料はぼくが準備した。ですから設  
計料というようなものじゃなくて、ぼくのど  
ころから材料を買ってもらったかたちにしたわ  
けです。

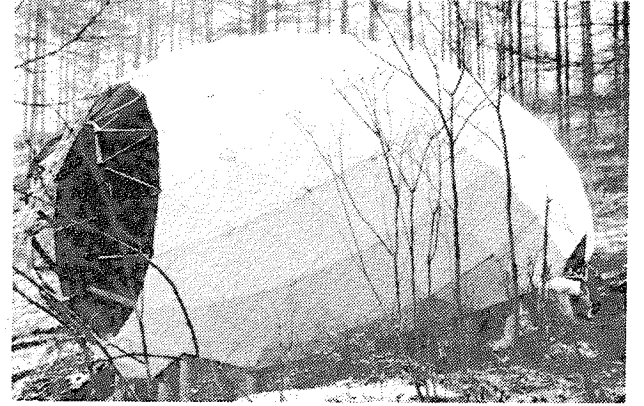
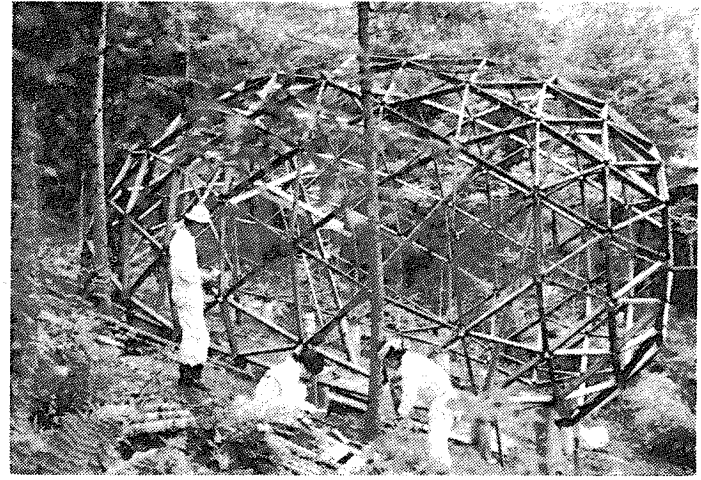
自分で家をつくるというの、かなりやば  
いところがあるんですよ。「ドゥー・イット  
・ユアセルフ」とか、ああいうのもすでに大  
きな産業になっていて、表面だけ見ると、ぼ  
くの場合もそういうやつと共通する面もない  
わけじゃない。でも考えかたはまったくちが  
うんです。さっきもいったとおり、人間が生  
きるのにどうしても必要なもの——衣食住に  
プライスがあるのは、基本的におかしいんじ  
やないか。しかし、こんな社会でそれですら  
ぬくのは不可能だから、なるべくハダカの価  
格を自分のしごとに浸みこませていく——そ  
れがどこまでやれるかというのが勝負どだ  
と思うんです。ぼくが知恵なり情報をあたえ  
る代償は、ちゃんともらわなくてはならない。



いるもので、特殊なものほどどこにもつかっていない。建築でつかわれている材料はなるべくつかわない。ふつうの家をつくるやり方となるべくよけておる。そうすると、わりとかんたんに家がつくれるなアというのが、いまの実感ですね。

ふつうの建築用材は高いし、自由じゃないんですよ。桢がはまっちゃう。

大工さん、とくに建築家なんかに設計をたのむと、いままでの建築というものの桢——たとえば坪四十万円の家、六十万円の家という桢からでられないわけですよ。ところがその家をきちんとチェックしてみると、坪いくらなんていうのはインチキ——というといすぎかもしれないけど、ぜんぜん根拠のない数字だということがわかる。木が一本いくらでクギ一本いくら、それを大工さんがひと叩きするといくら手間賃をとるのかというデータは、まったくない。となりの家かなんかを見て、あれくらいだったら坪いくらでできるのかといった程度の憶測で、ぜんぶが成立しているんです。もちろん専門家ですから、これはいくらで、これにはこれくらいかかるという程度のことはいえますけど、その根拠を徹底してついでいくと、わからないところの



いだったそうです。ガソリン代とか食事代とか、宿舎の貸別荘代とかですね。

広さはですね、なにしろタマゴ型で、壁と天井の区別もないんで算定不可能なのでですけど、長さが12メートル、幅が7メートルちょっと——けっこう大きいんです。常識的にいえば、二十坪ぐらいの床面積になるんじゃないかな。その材料がこれでぜんぶ。あとは必要な工具——ペンキをぬるものとかカナヅチとか、それもぜんぶふくめてかいてある。だからこれは設計図というよりも、やつぱりマニュアルというか、つくりかた手びき図なんだと自分では考えてます。

これはぼくのオリジナルじゃなくて、アメリカのヒッピーたちがやっていたやり方をぼくなりアレンジして、もうちょっとたのしいかたちができるようにやってみたんです。編集のしごととも似てますね。ものをあつめてきて、それをアレンジしなおすという意味ではね。

ここでつかっているのは、どれも本式の建築用材じゃないんです。おもな構造になっている木は、ぼくらのところでつくっている住宅のあまり材を、ドーム用に計算して切りなおしたやつですね。ベニヤもふつうに手には

ほうが大きいんですね。

そのところをいちどバラバラにしてしまつたらどうなるか。ぼくだって、自分がひとり家でつくるなんてムリじゃないかと常識的に考えちゃうんですが、意外にかんたんなのかもしれないよ、やつてみれば。

### 鉄パイプの家

建築の勉強をはじめたところから、ぼくは従来からある建築のスタイルとかには、基本的に興味もてなかつたんです。建築に興味もてないから、アメリカに材木を買いにいったりとか、そんなことばかりやつてるうちに、むこうで『全地球カタログ』にぶつかつた。ドームを自分でたてるのか、そういうことに興味をもちはじめ、それをちよつと体系的にやってみようかなとね。ドームばかりではなく、鉄パイプの家というのがあります。製鉄会社が土木用につくっているパイプを建築に転用して、内部は自分で勝手につくつてもらふという考えかたでやつているんですけれど、そういう手をいくつか工夫して、それでいままでの建築をとりかこんで、揺さぶつてみたいと思つてます。

ことからくる自由さと不自由さがある。都会のまんなかにこういうものをつくると、なかなか住民登録をしてくれないので、子どもが小学校にいくな問題がおきるとか、そういうことが実際にあるんです。

この場合は、建築とはなにかを規定しているのが下位の法律ですから、教育権とかをもちだして個別に役所と交渉して、小学校にいけるようにするわけです。ともかくも住む人間が自分の家をつくつているんですから、建設会社がつくつているんじゃないですから、つくること、すむこと自体が、なにかを表現していることになる。その表現の自由という面からやれば、どこまでやれるかというのもおもしろいところなんですけどね。そこで踏んばる材料にはこの家はなと思うんです。しんどいけど……。

家をつくることはかんたんでも、それにもなうバカな問題がある。その最大のものが土地問題ですね。

日本ではアメリカやマニラのようになにかないといつたけど、土地がものすごく高いから、土地を手に入れるだけでヒーヒーいっちゃつて、そこにたつ家はどうでもいいということになつて、それ以上の努力をしない。最初か

これは長野県の菅平にある農家ですけど、いまはもう三十歳ぐらになつたけど、若い農民が七年間、ひとりずつくりつづけているんです。長さが20メートル、高さが7メートル、幅が10メートルぐらあります。防水剤を入れて、一五〇万くらい。いまはもうちよつとあがつているかもしれない。

もともとは製鉄会社が下水用とかトンネル用につくつたものですから、長さは何メートルでも自由なんです。直径も既成品で1メートルから12メートルまである。それに鉄板のカーブはおなじ値段でオーダーができるんですから、断面形態は自由にできるんです。どんなカタチであろうが、トンいくらという重量で売るわけですね。ただくやししいのはカルテル価格ですから、どの製鉄会社からどんな見つもりをとつても、おなじ値段しかでてこない。そこがどうしても切りくずせないんです。

そのパイプを地面においたというかたちになるわけですね。なかは二階建て。この家をつくつている人は、はじめてぼくを訪ねてきたときはまだ二十一歳でしたけど、おやじさんが引きあげ者で、菅平には開拓ではいっただんです。いままですんでいた家も、そのおや

じさんと二人でつくつた。それやこれやで家は自分でつくつたほうがいいんだという考えが、はじめからあつたらしい。どうせ自分でつくるんなら、他人とちがうものをつくりたい。それでこういうことになつた。もう八年目にはいつたのかな。つらいけど面白いから、完成は絶対にはしないでしょうね。

こういうふうになつたのかたちを崩していくと、いわゆる家という感じがスツ飛んじやうわけですね。だからこの家のなかには、ちいさな舞台がひとつと、それからこの土地から化石がでるんですけど、それをたんねんあつめたギヤラリーがある。いわゆる家じゃないものにしてしようというか、大げさにいえば、美術館でもあれば劇場でもあるようなものをつくらうという気持ちで……。

ただ、これは地面においただけで、基礎がないわけですね。すると、日本の法律では大地に固定したものが建築だということになつてるから、これは建築じゃない。なにものであるかわかんないんで、戸籍がなくなつちゃうんです。戦後すぐのころは土管に人がすんでいたらしいですけど、それとおなじようなことをやつていけるわけだから、法律的な住宅とか建築とかからちよつとはずれている、その

ではならないと思ひます。

住宅の総生産量からみれば10パーセントぐらいいかないんですが、かれらが新聞やテレビをつうじて発している宣伝の量はすさまじいものがある。だからぼくらの子どもに家の絵をかかせたら、ぜつたいにあの家をかくと思ふんですよ。ミサワ・ホームとか秀和マンションとか。だから価格だけではなく、あのマス・メディアをおした家イメージは、日本人の家にたいする考えかたに本質的なダメージをあたえていると思う。すごいですよ。こんな国はほかにないですよ。世界でいちばんくるつてますよ。

こんな状態になつたのは東京オリンピック以降ですね。ちよつとアジアにでて、そこから日本を見れば、こんなクレージーな国はないといふことがすぐわかる。ぼくは一級建築士の免許をとつてない。冗談じゃないですよ。あれは田中角栄が議員立法で「建築士法」をつくつて、自分がその第一号になつたんですよ。そういうえびトラが建築家志望だつたし、フィリピンにイメルダ・マルコスもそうだつたなア。



## 編集後記

認可郵便物三種 第31号 通 1982年1月10日発行 毎月1回10日発行 水牛通信

「水牛通信」の三年目、「水牛新聞」からかぞえれば四年目になった。郵送と手売りでやっていく方針にはかわりない。本屋にいればあらゆる本があるが、そういうところで一冊の本をさがしてあてるのはむずかしい。本屋にない本があつていい。このいそがしい時代に、人びとは自分の手で書き写すことをやめた。手から手へわたされる「ことば」がどんなものか知らず、たくさんのことをただ消費する。軽印刷と郵送または手売りは、現在のところ、ことばをかく手と手わたす手に近づく方法のひとつだ。

マスメディアを否定するつもりはない。たくさんの人がひとつのものをよむのも、またよいことだ。見る目がちがえば、ひとつのことからおおくの別なことをひき出すことができる。だが、マスメディアは補助手段だ。通信は直接的であればあるほど、ひとをうごかす。自分でもそれとは気づかず。アメリカは一九八一年も多難な年だった。アメリカは

中性子爆弾をつくりはじめ、フランス社会党政権は太平洋に核をまきちらすことをやめず、イスラエルはレバノンを爆撃し、ポーランド軍隊は労働者に武器を向けた。国家の秩序、経済の安定、「社会主義」をまもるために。抗議の声をあげることが必要だ。だが、銃剣の下でこれから何年も生きていかなければならない人たちのために何かできることがあるだろうか。

日本では労働戦線統一が問題になっている。替成であれ反対であれ、労働者より組合組織をまもることを第一にしているようにしか見えない。右傾化や戦争の危機を叫んでみても、自分の頭上に火がおちてこないかぎり、ひとはうごかない。「しのびよってくる黒い足音」には、みんななれてる。だから、文明は繁栄の頂点で突然くずれおちる。何かがうまくはたらかない、とおもうと、あつという間に全体がとまってしまふ。人から人へ手わたされることばは、耐えることをおしえる。

## 購読の御案内

\*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

\*申し込みと送金は郵便振替(口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

\*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

## 水牛通信

第四巻第一号

一九八二年一月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 ㈱トライプリントショップ